

令和 2 年 7 月 5 日現在

機関番号：14301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05561・19K20771

研究課題名(和文)プラトンのidea/eidos概念の再検討--「イデア論」から「真実在説」へ

研究課題名(英文)Reconsideration of Plato's concepts of idea/eidos: from the theory of Forms to the theory of real beings.

研究代表者

早瀬 篤 (Hayase, Atsushi)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：70826768

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：これまで学者たちは、アリストテレスの報告に依拠して、プラトンの形而上学的理論を「イデア論」と呼び、その中核に「イデア」(eidos/idea)があると見做してきた。それに対して本研究は、アリストテレスの報告を保留して、プラトンの著作内部からその究明を行った。プラトンのeidos/ideaは、「感覚されるもの」と区別される「知られうるもの」(これは「真実在」とその「可知的像」と呼ばれるものを含む)を指す広い概念であることを論証し、プラトン哲学の中核にあるのはeidos/ideaではなく、「真実在」であることを解明し、またプラトンの形而上学説を「真実在説」として理解する方向性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代以来の伝統において、また現代の教科書的知識として、西洋哲学史を確立した哲学者プラトンの中心的思想は「イデア論」であると理解されてきた。しかし私は、このアリストテレスの報告に依拠する理解にもとづく、プラトンの著作を統合的に理解できないこと、そしてむしろプラトン著作中の「真実在」を核とする哲学思想を読み取るべきであることを詳しく論じた。プラトン哲学における「イデア」(eidos/idea)の役割を読み替えることによって、西洋哲学史における基礎的諸問題の一つに関して新しい視点を提供した。

研究成果の概要(英文)：Plato's metaphysical theory has been called 'the theory of Forms' on the basis of Aristotle's influential report in his /Metaphysics/. In this research project I have examined Plato's theory exclusively within his dialogues, thereby suspending the judgement as to whether it is the concept of eide/ideai (or Forms) that is located at the heart of Plato's metaphysics. I discussed in a series of articles that Plato's eidos/idea is in fact a broad concept, equivalent to 'intelligibles', which contains both the 'real beings' and its 'intelligible images', and tried to show a new way of understanding of Plato's metaphysical theory. I also suggested that it is misleading to call his theory as 'the theory of Forms'; instead we should call it as 'the theory of real beings'.

研究分野：西洋古代哲学史

キーワード：プラトン アリストテレス 形而上学 イデア論 真実在説

【1. 研究開始当初の背景】

「プラトン哲学の核心にあるのは“イデア論”(英 the theory of Forms, 独 Ideenlehre, 仏 la théorie des Idées) である」——この見解は、古代から現代に至るまでほぼすべてのプラトン学者に共有され、この見解にもとづいて哲学研究の基礎知識としてのプラトン理解、さらには高校の倫理の授業で教えられる項目や一般常識としてのプラトン理解が成立している。しかしこのような実情とは裏腹に、プラトンの諸対話篇のなかに首尾一貫した「イデア論」を見出すことは容易ではないし、そもそも「イデア」(これはギリシア語の *ἰδέα/εἶδος* の訳語のひとつである) がどのようなものなのか、学者たちの間でまったく見解の一致をみていないと言ってよい。

とりわけ問題となるのは、プラトンによる一見したところ矛盾した「イデア」の描写である。つまり一方で、例えば『饗宴』211a5-b1 では、本性において驚嘆すべき《美しさ》(これがイデアだと考えられている) は「例えば顔や手や身体が分けもつ他のどんなものとしても、また言葉や知識としても、現れることはない。またどこか、何か別のもののうちに、例えば生き物や大地や天空や何か他のもののうちにあるものとしても、現れることはない」と言われる。しかし他方で、『国家』476a5-8 では「そしてまさに正義と不正と善と悪とすべてのイデア(εἶδος)について同じことが言える。つまり、そのそれぞれはまさにそのものとしては一つのものだが、もろもろの行為や身体・物体や互いとの共有関係によってあらゆるところに現れて、それぞれが多くのものだと見える」と述べられている。ここで『饗宴』の記述は、イデアがこの世界を超越する個体であることを示唆するのに対して、『国家』の記述は、イデアがこの世界に内在し、多くの事物に共通な普遍であることを示唆するよう見える。

事実、この矛盾するよう見える「イデア」の記述に呼応しながら、現代のイデア論解釈も大きく二つの見解に分かれて相対立している。つまり一方で、伝統的な見解を支持する学者(近年では藤澤令夫や Daniel Devereux が含まれる)は、上記の『饗宴』に見られるタイプの記述を強調して、イデアとは、この世界を超越したところにあるものであり、諸事物の原範型だと論じている。しかし他方で、1990年代以降のプラトン形而上学研究を牽引してきた Gail Fine の他、R. M. Dancy や Francesco Ademollo は、上記の『国家』に見られるタイプの記述を強調して、イデアとは諸事物に内在する普遍であると論じている。なお、この問題についての議論は20世紀後半から2000年代初頭にかけてとくに活発になされたが、ここ10年ほどは注目すべき成果はなく、重要な諸問題が未解決のまま、多数の論文を書いた Fine の研究などが比較的有力な解釈と見做されている。以上が本研究開始当初のこの問題に関する状況だった。

【2. 研究の目的】

本研究の目的は、これまで「イデア論」と呼ばれてきたプラトン哲学の核心を、この用語の成立以前の段階に差し戻して、プラトンのテキストそのものから解明することだった。

そもそもプラトン哲学の核心に「イデア」があるという見解は、プラトンの著作から直接取り出されたものではなく、アリストテレスの『形而上学』A巻およびM巻で報告される、プラトン哲学成立の経緯に由来している。アリストテレスはそこで「プラトンは普遍を離在させて、それをイデア (ιδέα) と呼んだ」という趣旨の報告を行っている。確かに、アリストテレスは20年間プラトンとともにアカデメイアで学んだので、この報告はプラトン哲学理解のために重要な資料であることは否定できないが、その箇所でアリストテレスは中立的な立場から報告しているのではなく、「プラトンのように普遍を離在させてしまうと、イデアが個性と普遍性の両方を合わせもつことになるが、それは不可能である」と主張して、プラトン哲学を全面的に批判している。他方で、プラトンの著作そのものに立ち戻ると、超越的な対象を指示する特別な言い方として ιδέα/εἶδος が使われるのは、『パイドン』と『国家』の数箇所だけであり、その他の箇所——ここには我々が典型的な「イデア論」の表明であるとする『饗宴』209e5-212c3 や『パイドロス』246a3-253c6 や『ティマイオス』が含まれる——でこのような言い方がなされることは一切なく、むしろ「真実在」(τὸ ὄντως ὄν)という言葉が多用されている。

そこで、アリストテレスの批判的報告の信憑性をいったん保留してみると、重要な問いが生まれる。プラトン哲学の核心にあるのは本当のところ何なのか？ それは「イデア」なのか？それともそれはむしろ「真実在」であり、プラトンが『パイドン』と『国家』の数箇所で超越的な対象に関して ιδέα/εἶδος という言葉を使うのは特別な理由があるのではないのか？例えば ιδέα/εἶδος は、ある場合に超越的对象を指示し、別の場合に普遍的対象を指示するのではなく、もともとその両方を包括的に指示する広い概念なのではないか？これらの問いに、プラトンのテキストそのものに依拠して解答を与えることが本研究の目的だった。

そしてこれらの問いに答えるにあたり、私は次の二つの推測を作業仮説として採用した。つまり、(a)プラトン哲学の核心にあるのは「イデア」ではなく、事物の原範型として常にそれ自体である「真実在」であること、そして(b) ιδέα/εἶδος は「真実在」とその「可知的的像」——『国家』の洞窟の比喩における「太陽」と「水面に映った太陽」に相当するもの——という二種類の可知的対象を包括的に指示する概念であること。本研究はたんにこの二つを作業仮説としてプラトンの著作を考察するだけでなく、この二つの作業仮説の再検討も課題とした。

【3. 研究の方法】

本研究は次のように実施された。

2018年10月の課題採択後、まず、学者たちが「イデア論」解釈の拠り所とし、またプラトン解釈の基本的な枠組みを見出してきた『形而上学』A巻とM-N巻におけるアリストテレスの批判的報告を再検討した。このとき難解な『形而上学』のテキストを緻密に検討した他、この問題に密接に関連する「存在論的離在・優先性」という概念について論じた Michael Peramatzis や Emily Katz らの最近の研究を慎重に考察した。

それと同時に、プラトンの $\text{idéa}/\text{eĩdos}$ という概念を、プラトンの著作年代順との関連で正確に定式化するための研究を行った。一部の学者たちは、 $\text{idéa}/\text{eĩdos}$ という概念がプラトンの著作年代順に応じて変遷していると考えて、初期著作では諸事物に内在する普遍を指し、中期著作では超越するアイデアを指すと主張するので、この立場を批判的に検討する必要があるためである。1990年代後半以降、プラトンの著作年代順に関連する研究は新しい転機を迎えており、非常に多くの二次文献が出版されている。これらの文献をかなり大規模に調査し、提示されている論点を詳しく整理した。その成果の一部を2018年の京都大学文学研究科シンポジウムで一般の聴衆向けに解説した他、中核的な成果を2019年の古代哲学会談話会において発表し、他の研究者と意見交換を行った。

次に、二年目の大部分で、問題となる『パイドン』と『国家』の中心巻において $\text{idéa}/\text{eĩdos}$ がどのようなものとして提示されているのかを検討した。古典ギリシア語で書かれたプラトンのテキストの緻密な分析を行い、二次文献を広範に調査した。ただし、夥しい二次文献の全面的な調査は無意味に終わる公算が高かったため、主要課題として次の三点を見定めることを設定した。つまり、(i) $\text{idéa}/\text{eĩdos}$ はすべて可感的対象と区別される可知的対象なのか、(ii) ある同一の $\text{idéa}/\text{eĩdos}$ がそれ自体でのみならず、何かのうちにもありうるのか、(iii) ある同一の $\text{idéa}/\text{eĩdos}$ が原範型だけでなく、普遍でもあるのか？

なお、二年目の夏季休暇中にはイギリスに出張し、その時点までの研究結果を、この問題に知見のある Oxford 大学の Luca Castagnoli 准教授やプラトン哲学の権威である Durham 大学の Christopher Rowe 教授と議論した。Oxford 大学ではワークショップに参加して発表を行い、参加者と意見交換を行った。

【4. 研究成果】

本研究の主要な研究成果は、2019年9月に Oxford 大学のワークショップで発表した“Separation and the Ontological Status of $\text{idéa}/\text{eĩdos}$ ”にまとめられた。そこで私は、アイデア論解釈を採用する学者たちが「内在主義者」と「離在主義者」に分かれて意見の一致を見ない原因がまさしく「アイデア論」という枠組みにあることを指摘し、『パイドン』と『国家』において $\text{idéa}/\text{eĩdos}$ は真実在とその可知的像を包括する「可知的対象」(*noêton*)と同じ身分をもつことを論じた。この原稿は今後さらなる検討を加えた後に海外の学術雑誌に発表する予定である。

この他に、『古代哲学研究』51号に発表した論文「発展主義解釈と新統一主義解釈—プラトン研究の最近の動向から」において、19世紀半ばに成立し、国内でいまなおプラトン研究の共通前提と見做される「発展主義解釈」に内在する諸問題を整理・解明するとともに、本研究の立ち位置をプラトン哲学の全体像に関する諸研究との関連において明確にした。この研究によって、本研究で解明を目指すプラトンの $\text{idéa}/\text{eĩdos}$ という概念の問題を著作年代順の問題と結びつけることが可能になり、本研究の課題をより正

確に定式化できるようになったと考えている。発展主義解釈は、文体統計学的研究では初期著作に分類される『饗宴』と『パイドン』を、プラトン独自の「イデア論」を表明する著作と見做して、中期著作に分類することで成立する。この解釈はとくにイデア論の「離在主義解釈」と親和性をもつ。私は、ここで発展主義解釈が想定するプラトンの独自思想としての「イデア論」に明らかなテキスト上の問題を指摘しつつ、この「イデア論」が、文体統計学的研究の著作年代順序を修正するほどの根拠にはならないと論じた。

この他に、2018年12月に京都大学文学部シンポジウムで一般聴衆向けに研究発表を行い、上記の著作年代順の問題に関して、とくに歴史的ソクラテスと、プラトンの著作に描写されるソクラテスとの距離関係に焦点を当てながら、最近の研究の動向を紹介した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 早瀬 篤
2. 発表標題 プラトン哲学へのアプローチの最前線
3. 学会等名 京都大学文学研究科公開シンポジウム
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----